

『滴天髓』 衰旺・中和・源流・通関の項

『滴天髓』は、一三〇〇年代元代末から明代初期に活躍した劉基（劉伯温）によって著わされた書といわれていますが、著者が実際に劉基であったかどうかは文献考証的に定かではありません。

ここに掲げた原文は、二〇世紀初頭に袁樹珊により撰輯・校刊された『滴天髓闡微』を元にしています。また『滴天髓闡微』自体は、一八〇〇年頃、任鐵樵によって公刊された『滴天髓』の評註です。

なお、「衰旺」「中和」「源流」「通関」などと小見出しがありますが、これらは任鐵樵が袁樹珊のいずれかにより追記されたものと考えられます。

また、「原註」とあるのは、劉基による評註とされているもので、「任註」は、任鐵樵による評註です。

原文の下にある通し番号は、『滴天髓闡微』における原文の掲載順に対応しています。

衰旺

能知衰旺之眞機。其于三命奥。思過半矣。 52

《衰旺の眞機を知るにあたるなれば、それは三命の奥において思いは半ばを過ぎるや。》

真（眞）…うそや欠け目のない。欠け目なく充実した状態。

機…物事の細かな仕組み。事が起きる細かいかみ合い。からくり。

于…前置詞。～において、～に対して

三命…『三命通會』という四柱推命の書があるが、「三命」は四柱推命の別称。三命は、干支を構成する、天元、地元、人元、つまり天干・地支・蔵干の三を指すと解することができる。

【解説】

「衰旺の眞機を知ることができれば、四柱推命学の理解は半分は終わったようなものである」と、やや挑発的な意味にも取れる言い方がされている一文です。こつした表現がされているのは、衰旺の「す」さえも理解することなく、推命に関わっている自称専門家が多くいたからではないかと思われれます。

さて、「衰旺の眞機」とは、四季の巡りの中における五行の動勢のことと言えます。春は木が旺じ、夏は火が旺じ、秋は金が旺じ、冬は水が旺じ、それぞれの季節の変わり目に土が旺じる。この一年の周期の中における五行の動勢を理解することは、四柱推命学の初期の段階においては、重要な項目であるといっているのです。

「眞機」とある点について補足するなら、旺相死囚休における旺相は「進気」であり、死囚休は「退気」であり、この違いを認識することも重要な要素であると言えます。

つまり『滴天髄』の「通神論」中の「理気」の中にある、「進み、退くをよろしく抑揚すべし。」とある点についても深い理解が求められるのです。

「進気」「退気」は、事象に大きな相違をもたらす要素と言えます。このあたりを含めて理會することができたなら、「三命の奥において思いは半ばを過ぎる」と、ここにいわれているように言つことができるのです。

中和

既識中和之正理。而于五行之妙。有全能焉。

53

《すでに中和の正理を識り、しかして五行の妙においては、その上に加えて能をまつたきする。》

于… 前置詞 くにおいて、くに対して

妙… 形容詞・名詞 きめ細かい。不思議な働き。

有… 動詞 存在している。たもつ。助詞 さらに輪をかけて。その上に加えて。

全… 副詞 まったく。ぜんぶ。すっかり。形容詞 欠けたところがない。まったく。動詞 まとつする。欠けることなく保つ。

能… 名詞 はたらき。

焉 エン… 助詞 文末につけて語調をととのえる。副詞 いずくんぞ。いずね。

【解説】

『滴天髄』は全133の歌訣からなりますが、この53番目の句において、「すでに中和の正理を識り」と言い切っているのです。

つまり前文において、「三命の奥において思いは半ばを過ぎるや。」といい、続くこの句では四柱八字における五行の趨勢の見方について、読者は十分に理會しているものとして論を進めているのです。表現を変えるなら、『滴天髄』は、中級どころか、四柱推命に対してかなり高度な予備知識がある読者を想定して書かれた書であることを、この一句から知らされるのです。

さて、右の句を解するなら、四柱八字において五行が調和することをよし、とするのが、四柱推命の原則的な考え方であり、その調和の理、見方を会得したあとに、またさらに五行のそれぞれのはたらきを見極める必要性があることを、しかして五行の妙においては、その上に加えて能をまつたきする。」といているものと解することができるのです。

日干を中心に据え、中和、調和を見極めたあと、さらに詳細な命のあり方を知るためには、四柱八字の天干、蔵干のはたらきを、その干自体の作用、そして上・下・左・右におよぶ生・剋・幫の作用により、四柱八字内における干の働きを詳細に看る必要があるとい

っているものと解することができるのです。

源流

何處起根源。流到何方住。機括此中求。知來亦知去。

54

《いづこが根源を起し、流れ到りて、いづこの方へとどまる。機はこの中が求めるを括り、来たるを知り、また去るを知る。》

何… 疑問詞 どこ。なに。形容詞 なこの。なんの。副詞 なんぞ。どいつ。
何處 いずこ・いつこ…どこ。どのあたり。
方… 名詞 行く先。しかた。やり方。技術や技。
住… 動詞 とどまる。とどめる。すむ。
機… 名詞 複雑な仕掛け。物事の細かい仕組み。きざし。
括… 動詞 くくる。物事をひとつにまとめる。結んで束ねる。
此… 代名詞 これ。この。接続詞 かつ。
中… 名詞 進行している物事の半ば。ものの真ん中。
求… 動詞 もとめる。引き締める。さがしもとめる。ほしがる。

【解説】

前文までで五行の趨勢の見方という一般論的なことに触れられていましたが、ここでは四柱八字における日干の強弱の見方に絞って説明されているものと言えます。

「いづこが根源を起し」とは、「何が四柱八字における五行および日干の強弱を決定するのか、その源は何かを特定しなければならぬ」という意味です。

「源」としてもっとも重要なのは、月支の蔵干が示す旺じる五行と言えます。旺じる五行が明らかになれば、旺相死囚休により、五行それぞれの趨勢を知る手がかりを知り得ることになります。

もうひとつ「源」として重要なことは、四柱八字において、上下、左右にいかなる干が隣接しているかを見極めることと言えます。隣接する干と干によりもたらされる生と剋と幫の作用が、どのような影響を四柱八字に結果的に及ぼすかを推察することです。

この思考の過程を「流れ到りて、いづこの方へとどまる」と表現し、「流れ到りて」とは、生と剋と幫の作用が隣接する干に次々と影響を及ぼしていく状態を表現しているものと解することができるのです。

以上のような、四柱八字における生と剋と幫の作用を見極めることは、決して容易なことではないのですが、「機はこの中が求めるを括り、来たるを知り、また去るを知る。」といい、「四柱八字における生・剋・幫によりもたらされる複雑なシステム（機）は、四柱八字の中心である日干（中）が求めるものを知る手段であり（括り）、また整理することにな

り、結果的に、日干が求めるもの（来たる）、不要とするもの（去る）を明らかにすることになる」といつているのです。

通関

關内有織女。關外有牛郎。此關若通也。相邀入洞房。

55

《関の内に織女があり、関の外に牛郎がある。この関がもし通じるなら、あいむかえて洞房に入る。》

關＝関： 名詞 せき。ものともものつなぎ目の仕組み。さかいめ。

織女 シヨクジヨ … 名詞 機で布を織る女。織女星のこと。七夕の織り姫。

牛郎 ギユウロウ … 名詞 牛飼いの人。牽牛星のこと。

若： 接続詞 もし。仮定を表わす。指示代名詞 前文を受けて、そのような、という意味を表わす。

邀 キョウ … 動詞 むかえる。待ち受ける。相手が来るところに待つて迎える。求める。よびよせる。

洞房 ドウボウ … 名詞 奥深い部屋。婦人の部屋。

【解説】

この一節は、七夕にまつわる彦星と織り姫をたとえとして取り上げ、風情のある表現を前面に押し出しつつ、四柱推命学の高度な理を説明しているところです。

日本の翻訳本においては、この一節の解釈に関して、原文の情緒的な表現に惑わされたものが一部見受けられ、解釈の仕方にやや混乱があります。文脈からして、日干の強弱の見方についての一文と考えるのが妥当であろうと思われれます。

この一句の重要な点は、「関」といわれていることをどう解するかにあります。「関」とは、干と干を隔てる原因となるものです。

原註、任註とみますと、その解釈はほぼ類似していて、任註に「通関は剋制の神を引通する」と端的に表現されていることが、正しい解釈であると思われれます。

「通関」とは、「関を通じる」という意で、この『滴天髓闡微』では小見出しとして使用されています。

例えば、木と土は剋の関係で、四柱八字中に隣接するなら、対峙することになりますが、火が巡れば、木が火を生じ、火が土を生じることにより、木と土の間の「関」を火が通じさせるといっているのです。

通変の視点から説明するなら、官殺が日干を剋している状況において、印が巡れば、通関となるということになるのです。

ただし、この一節では、「この関がもし通じるなら、あいむかえて洞房どうぼうに入る。」とありますので、通関が良好な作用をもたらすことを前提とした話であることを見逃してはならないのです。

四柱八字のあり方により、「関」を通じても、良好な場合だけでなく、不良な場合もあることを忘れてはならないのです。

また、例えば、日干が甲木こうぼくで庚金こうごんに剋されている場合、たとえ運歳に壬癸水じんきが巡っても、甲木と庚金の間には壬癸水が分け入って、甲木が庚金から剋されなくなるなどということはありません。実証的には、甲木と庚金が四柱八字中で並んだ時点で、甲木が庚金から剋作用を受けることは、逃れることができないことと考えなければなりません。

運歳に巡った壬癸水は、甲木を助け、庚金を弱め、結果的に、庚金が甲木を剋する作用を緩和するだけなのです。

最終更新：06・10・11